

5月31日（日）サムエル記第二12章7～12節

「あなたがその男です。」（7節）

ナタンは単刀直入に「あなたがその男です。」と言います。例えを通してダビデに自分がしたことを認めさせ、言い訳も否定もできない状況へと追い込みました。誰も知っていないと思っても主はすべてをご存じであることをダビデ自身が思い知らされたことでしょう。

「イスラエルの神、主はこう言われます。」と言った後、主がダビデにしたことを恵みとして語ります。まず「わたしはあなたに油を注いで、イスラエルの王とした」とありますように、主がダビデをイスラエルの王として選んでくださいました。そして、ダビデはサウルから命を狙われ、危険な中を通されましたが、主はサウルの手からダビデを救い出してくださいました。8節で「さらに、あなたの主君の家を与え、あなたの主君の妻たちをあなたの懷に渡し、イスラエルとユダの家も与えた。」これは、サウルの王権が移譲され、王家を引き継ぎ、それによってユダだけではなく、サウル家に属する地域も含めイスラエル全体を治める王とされたということです。「それでも少ないというのなら、あなたにもっと多くのものを増し加えたであろう」と言います。つまり、ダビデに与えられたものはすべて主の恵みとして出たことであることが分かりますし、主は恵みとしてあらゆるものを与えようとしてくださっていたことが分かります。しかし、ダビデがバテ・シェバと姦淫の罪を犯し、ウリヤを戦いの激しい戦場へ送り、戦死するように仕向け、その後彼女を自分の妻としたことは、主のことばを蔑み、主の目に悪であることを行ったに等しいのです。私たちは、主からあり余るほどの恵みと祝福をいただいているにもかかわらず、主に感謝もせず、主をほめたたえることもせず、主のみこころを伺いながら、それに従うこともせず、逆に主のみことばの権威を蔑み、主の目に悪であることを行い、主のみこころを損なってしまっていることはないでしょうか。13節で自分の罪を素直に認めて悔い改めているダビデのように示された罪を悔い改めましょう。

ダビデの罪に対する最初のさばきとして、「今や剣は、とこしえまでもあなたの家から離れない。」とあり、長子アムノンがアブサロムによって殺害され、（13章28、29節）ヨアブと道具持ちの十人の若者によりアブサロムが殺され（18章14、15節）ソロモン王がアドニヤを討ち取らせました。（列王記第一2章25節）このようにして、主の預言はダビデ家において成就しました。次に「あなたの妻たちをあなたの目の前で奪い取り、あなたの隣人に与える。彼は白昼公然と、あなたの妻たちと寝るようになる」との預言は、サムエル記第二16章21、22節で成就しました。主の語られたことは必ず成就しますから、主を恐れなければなりませんし、主の御前に犯した罪の刈り入れは必ずしなければならないことを思い、身を慎みつつあゆ

まなければなりません。

6月1日(月) サムエル記第二13章15～18節

「アムノンは、激しい憎しみにかられて、彼女を嫌った。その憎しみは、彼が抱いた恋よりも大きかった。アムノンは彼女に言った。『起きて、出て行け。』」(15節)

タマルに性的暴行を加えたアムノンは、激しい憎しみにかられ、彼女を嫌いました。その憎しみは、彼が抱いた恋よりも大きかったと言われています。「起きて出て行け」というアムノンに対してタマルは、追い出すことは、アムノンが自分にしたことよりも悪いと言います。なぜなら、このことも律法に反する行為だからです。申命記22章28, 29節を見ますと、まだ婚約していない処女の娘を捕らえて寝た場合、娘の父に銀五十シェケルを渡して彼女はこの男の妻となり、彼は一生この女を離縁することができないと言われています。しかし、アムノンは彼女の言うことを聞こうともせず、召使いの若い者に命じてタマルを外に追い出し、戸を締めさせました。

結婚外のところでなされる性行為はすべて主が忌み嫌われる罪であって、それは決して祝福をもたらすことはありません。そして、歴史家のタキトゥスは、「自分が傷つけた相手を憎むのは、まさしく人間の常である。」と言いました。また、フォッケルマンという学者は、「アムノンの暴行は彼が人と接することのできない、いびつな自己中心主義者であることを暴露している。彼にとって最悪なことは目撃証人がいることであり、他ならぬタマルが当の証人であった。それ以来、彼は彼女と顔を合わせるができなかった。なぜなら、そのような出会いは、とんでもない恥さらしを繰り返すことであり、人間として未熟な自分との耐え難い対決であったからである。」と言います。つまり、自分が傷つけた相手、すなわちアムノンにとってはタマルですが、タマルを見るたびに彼は自分の罪を思い出すこととなります。それは、自分の恥をさらすこととなり、人間として未熟な自分を常に思い知らされるからです。それと同時に、第一位の王位継承者であったアムノンは、このような罪と律法違反を裁かれることにより王位継承権がはく奪されることを恐れた可能性もあります。

罪は、そのままにしておけば時間とともに薄れていくかもしれませんが、何かのことで思い出され、自分の恥と向き合わざるを得なくなりますし、常に人間として未熟な自分と対峙することとなります。ですから、アムノンのようになかったことにするのではなく、謙遜に主の御前に罪を悔い改めて主の赦しをいただきましょう。

6月2日（火）サムエル記第二13章19～22節

「ダビデ王は、事の一部始終を聞いて激しく怒った。」（21節）

アムノンによって外に追い出されたタマルは、決して自分の悲しみを隠すことなく、頭に灰をかぶり、処女である王女たちが身に着けていたあや織りの長服を引き裂き、手を頭に置いて、泣き叫びながら歩きました。20節で兄のアブサロムは、おそらく何があったのかを察したのでしょうか。「妹よ。黙っていなさい。彼はおまえの兄なのだ。このことで心配しなくてよい。」と言います。つまり、アムノンはタマルの異母兄になりますので、裁判に訴えたりせず、自分に任せよということです。そしてタマルは、自分が被害者であるにもかかわらず、社会から疎外され、結婚もできず、兄のアブサロムの家で一人わびしく暮らしました。そのようにして罪は一人の女性の人生をも奪ったと言っても過言ではありません。

21節で、ダビデは事の一部始終を聞いて激しく怒りました。しかし激しく怒っただけでした。もしかすると、アムノンが第一位の王位継承者なのでダビデも気を使ったのかもしれませんが、自分もバテ・シェバと姦淫の罪を犯したことを考えれば厳しくは言えないということだったのでしょうか。一方アブサロムは、このことについて何も言いませんでした。それは、彼が妹のことでアムノンを憎んでいたからです。そして、もしかすると怒るだけで何も処罰しないダビデの姿を見て、復讐は自分がしなければならないと思ったかもしれません。

私たちにも感情がありますから、人を憎むことはないにしても喜怒哀楽は当然あるでしょう。自分の心に怒りがわいてきた時には、どうしておられるでしょうか。決してそのままにしたり、自分で怒りをしずめようとするのではなく、主に祈って平安をいただきましょう。

6月3日（水）サムエル記第二13章23～29節

「アブサロムの若い者たちは、アブサロムが命じたとおりにアムノンにした。王の息子たちはみな立ち上がって、それぞれ自分のらばに乗って逃げた。」（29節）

23節に「満二年たって」とありますが、このことについて王に対する膨大な案件のゆえに、ダビデや他の者たちもアムノンとタマルのことはすっかり忘れてしまっていたのではないとか、問題がもみ消されたような雰囲気を感じられるとの説明がなされることもあります。二年の月日が流れても、アムノンの犯した罪は決して消えることがなく、アブサロムのアムノンに対する憎しみも決して消えることはなかったはず。アブサロムは、バアル・ハツォルに行き、羊の毛の刈り取りの祝いをしました。アブサロムは王子たち全員とダビデ王と、その

家来たちを招待します。しかし、しきりに勧めたにもかかわらず、ダビデは行きたがらず、ただ彼に祝福を与えました。そして、アムノンを私どもと一緒に行かせてくださいとの勧めにより、ダビデ王はアムノンと王の息子たち全員を彼と一緒に行かせました。

アブサロムは自分に仕える若い者たちに、祝祭でアムノンが酔って上機嫌になるのを待ち、自分が合図をしたら、彼を殺害するように命じます。29節でアムノンの殺害は、アブサロムの計画どおりになされ、王の息子たちは、自分たちにも危険が及ぶかもしれないと思ったのでしょう。それぞれ自分のらばに乗って逃げました。

アムノンのタマルに対する性的暴行は、アブサロムによる暗殺という結末をもたらしました。そこには、性的罪→復讐心→復讐からの殺害というように、罪の連鎖を見ることができますし、このように罪は罪を呼ぶことをあらためて思われます。この罪の連鎖を断ち切ることができるのは、イエス様による罪の赦しだけです。主イエス様により罪を赦していただき、自分に関わる罪の連鎖を断ち切らねばなりません。

6月4日（木）サムエル記第二13章30～33節

「王は立ち上がり、衣を引き裂き、地に伏した。傍らに立っていた家来たちもみな、衣を引き裂いた。」（31節）

アブサロムが自分に仕える若い者たちにアムノンの殺害を命じましたが、その場の状況が非常に混乱していたからでしょうか、ダビデには「アブサロムは王のご子息たちを全員殺しました。残された方は一人もいらっしゃいません。」との誤報が伝わりました。それに対してダビデは、立ち上がり、衣を引き裂き、地に伏して、彼の悲しみを表しました。また傍らにいた家来たちも同じように衣を引き裂き、ダビデとともに悲しみを表しました。ところが、ヨナダブが証言して殺されたのはアムノンだけだと言ったのです。「それはアブサロムの命令によるもので、アムノンが妹のタマルを辱めた日から、胸に抱いていたことです。」と、まるでアムノン殺害を事前に知っていたかのように、アブサロムがアムノンを殺害した動機まで語っています。5節においてアムノンにタマルに対する思いを遂げるように入れ知恵をしたヨナダブは、その後もアブサロムのことを注意して見ていたのでしょうか。そして、この場でタマルに対する復讐としてアムノンを殺害することも事前に知っていたのかもしれませんが。すべてにおいて悪知恵の働く人物だったと言えます。

12章10節で「今や剣は、とこしえまでもあなたの家から離れない。」とナタンはダビデに忠言していますが、まさにナタンが言ったとおりに、アブサロムは、復讐としてアムノンを殺

すようなことをしたのです。それと同時に、アブサロムは、自分は正しい動機をもって正しいことをしていると思って、自分に仕える若い者たちにアムノン殺害を命じたことでしょう。しかし、アムノンを殺したことは自分の長子を失ったダビデに深い悲しみを与えることとなりました。私たちは、自分で問題に対処しようとするとうまくいきません。むしろ、すべてを知り、すべてを最善に導かれる主にゆだねるべきです。主は、すべてを完璧に治めることのできる方だからです。

6月5日（金）サムエル記第二13章34～36節

「アブサロムは逃げた。」（34節）

「アブサロムは逃げた」とあります。恐らくダビデ王にアムノン殺害の報告がされる前にアブサロムは逃げたと思われます。彼がなぜ逃げたかについては推測するしかありませんが、恐らく次期王位継承者である長子のアムノンを殺してただですむとは思っていなかったのかもしれませんが。憎しみに任せた復讐は、父親であるダビデ王の前から逃げなければならないような結果をもたらしました。罪は必ず人に悪い影響をもたらすことがここからも分かります。私たちは、罪を犯すことから完全に免れることはできませんが、憎しみによって引き起こされる罪は感情を抑えることによって避けることは可能です。主の助けをいただきつつ感情から出る罪をコントロールできる信仰者とさせていただきます。

王子たちは無事帰って来ましたが、彼らは声をあげて泣き、王もその家来たちも激しく泣きました。これは自分たちの兄であるアムノンが殺害されたことによるショックから泣くしかなかったのですが、泣き声は王の宮殿中に響き渡ったことでしょう。罪は、泣き声を呼び、あらゆる場所に悲劇をもたらします。私たちも、主に贖われた者たちとして、罪によって悲劇や悲しみを神の家である教会にもたらす者たちではなく、むしろ神の家に喜びと神の祝福と恵みをもたらすような信仰者でありたいと思わされます。そのような者として歩むことができるように今日も主の助けを祈り求めましょう。

6月6日（土）サムエル記第二13章37～39節

「アブサロムのところに向かって出て行きたいという、ダビデ王の願いはなくなった。アムノンが死んだことについて慰めを得たからである。」（39節）

ゲシュルの王アミフデの子タルマイとは、アブサロムの母方の祖父でした。ゲシュルとは、

ギルアデの北方、イスラエルとシリアの緩衝国であったと言われています。（3章3節参照）アブサロムは、自分のしたことをとがめられるのを恐れて逃げたのだろうと思われますが、このことにより彼の王位継承権も剥奪されることとなりました。その一方で「ダビデは、毎日アムノンの死を嘆き悲しんでいた」とありますが、アムノンの死がどれほどの悲しみをダビデに与えたかが分かります。

38節を見ますと、アブサロムは、ゲシュルに三年ほどいました。これを短いと考えるか長いと考えるかは人それぞれだと思いますが、アブサロム自身もさまざまなことを考えさせられたことでしょう。アムノンに対する憎しみと妹タマルに対するあわれみの気持ちは決してなくなることはなかったと思われます。その一方でアムノンを殺害したことにより、祖父のところにまで逃げて、そこで過ごさなければならなかったことは多少の不本意な思いはあったかもしれません。そして、冒頭でも少し申しましたが、アムノンの死による喪失感をダビデは乗り越えなければなりませんでした。それとともにアブサロムも自分のもとを離れて行った喪失感も克服しなければなりませんでした。しかし、その時には必ず自分のバテ・シェバとの姦淫の罪を思い出させられ、自分の犯した過ちを同じように息子たちも繰り返していることを認めざるをえませんでした。そのことは、ダビデが家庭を治めきれなかったことにつながるかもしれません。

39節の「アブサロムのところに向かって出て行きたいという、ダビデ王の願いはなくなった」というのは、アブサロムに対する怒りからアブサロムのもとへ遠征するという意味に取ることができますが、アムノンが死んだことについて慰めを得たので、その願いはなくなりました。もちろんそのような心の変化を引き起こした理由は分かりませんが、主の働きであることは間違いないでしょう。私たちも、主によって心を落ち着かせたり、慰めを得たり、平安を保つことが可能です。もし心がざわつくようなことがあれば、主に祈りましょう。主は必ず助けてくださいます。

※来週の「みことばの扉」から月曜日開始の7日分とするため、1日分を多く掲載します。

6月7日（日）サムエル記第二14章1～7節

「ツェルヤの子ヨアブは、王の心がアブサロムに向いていることを知った。」（1節）

1節の「王の心がアブサロムに向いている」ということについては議論があります。一人の注解者は、殺人犯であるアブサロムを裁く義務を感じたので、王の心はアブサロムに敵対して

いたと解釈することが適当ではないかと主張します。また別の学者は、ここで用いられているヘブル語の前置詞から否定的なニュアンスが伝わりますと解説しています。しかし、13章39節で「アブサロムのところに向かって出て行きたいという、ダビデ王の願いはなくなった」とありますので、恐らくダビデの心がアブサロムに敵対していたというような否定的な意味はないと私は考えます。むしろ、1節で言われていることは、ダビデのアブサロムに対する好意的な感情です。長子であったアムノンの亡き後、アブサロムを王位後継者としてダビデが考えていたということなのでしょう。そのことをヨアブが知り、何とかしてアブサロムをダビデのもとに連れ戻したいと考えたのかもしれませんが。ヨアブはテコアに人を遣わして、そこから知恵のある女を連れて来させます。ここで知恵があるというのは、機転を利かせて王の前でうまく芝居を演じることを言っています。ヨアブはその女に、喪服を着て、死んだ人のために長い間喪に服す女を演じるように命じます。そして、王の前に出た時にヨアブが彼女に命じたとおりのことを話します。そして「助けてください。王様」と、王に助けを求めるあわれな寡婦を演じます。そして彼女の語る話しの内容とは、夫の亡き後、二人の息子が野原でけんかを始め、仲裁する者がいない中で、一人が相手を打ち殺したというものでした。すると親族全体が彼女に詰め寄り、「兄弟を打った者を引き渡せ。彼が殺した兄弟のいのちのために、彼を殺し、この家の世継ぎを消し去ろう」と言ったということです。民数記35章21節によれば、親族の訴えは理にかなっています。しかし、もし残された息子まで殺されたなら、もはや家を継ぐ者がなくなり、家は残らなくなってしまうと訴えたのです。話しの内容は、アムノンとアブサロムの事件に合わせているように思えます。そして、この話しを通してもしかすると、ヨアブはダビデの心をアブサロムにもっと動かそうとしたのかもしれませんが。

私たちもヨアブのように人の心の動きを察して自分で動こうとすることがあります。しかし、自分で何か動くより先に主に祈って、みこころを伺いつつ、主にゆだねるべきことは主にゆだねていく必要があります。主より先に自分が動く信仰者とならないように。